

スキーオリエンテーリング 世界選手権大会

2000年2月28日-3月5日

ロシア・クラスノヤルスク

ロングディスタンス

ME

1	Kormtshikov Vladislav	RUS	1:38:28
2	Lanki Jukka	FIN	1:38:45
3	Gruzdev Andrei	RUS	1:40:16
55	丸山 哲史	JPN	2:31:30
61	関 清	JPN	2:55:41
	若井 広太郎	JPN	失格

WE

1	Hannus Arja	SWE	1:00:04
2	Anttila Liisa	FIN	1:00:16
3	Kosonen Hanna	FIN	1:02:02
28	植野 由香	JPN	1:28:19

ショートディスタンス

ME

1	Corradini Nicolo	ITA	33:13
2	Khrennikov Eduard	RUS	33:53
3	Grusdev Andrey	RUS	34:33
49	丸山 哲史	JPN	46:52
59	若井 広太郎	JPN	53:04
60	関 清	JPN	55:52

WE

1	Vlasova Tatiana	RUS	22:42
2	Hasselstrom Lena	SWE	22:46
3	Anttila Liisa	FIN	23:02
25	植野由香	JPN	30:27

リレー

ME

1	Russia	164:23
2	Finland	166:50
3	Sweden	171:10
14	Japan	238:38
15	USA	256:02

インド・ヴォッカティのステージと2月28日～3月5日、酷寒のロシア・クラスノヤルスクで開催された2000年SKI-O世界選手権に参加しました。このコーナーでは、世界選手権に参加して帰国間もない選手のレポートを主として報告します。

クラスノヤルスクでは20カ国100名余の選手が熱戦を展開しました。

近年、ヨーロッパで開催される世界選手権大会は、参加国・選手数が増加傾向にありましたが、今回は極端に減少しました。理由は、広大なロシアのしかも奥地と言う印象がぬぐえないクラスノヤルスクが開催地であること、ロシアの政情不安、経済事情でしょうか。

参加選手数の減少を心配したIOFでは、エントリリミットを翌日に控えた1月14日、ワールドカップ参加でフィンランドに集まっていた各国チームリーダーに、1ヶ国当たり参加選手数増加の限定特別提案をしましたが、有力国の賛同を得られず議題にならなかったという事もありました。

日本のSKI-O選手も1998年オーストリア世界選手権大会の終了後からこれを目指して準備していましたが、諸般の事情から国内での選考大会は実施できず、2年間の内外大会の成績記録を基に自薦他薦して、男性・女性それぞれを6名に絞り、JOC会長から一括して指定を受けました。

指定された個々の選手には、SKI-O研究会が参加意思の確認を取り、最終的に女性は植野由香1名、男性は丸山哲史、関清、若井広太郎3名の参加となりました。

今回の開催地がロシアなので、ヴィザの取得をはじめ、航空便予約や現地情報等準備に時間的な余裕が必要であり、その点を選手であるが経験豊富で事情に通じている丸山君に一任し、4名は2月25日出発しました。

ホームページで各種別のリザルトを見ると、上位常連国はその差が秒単位の熾烈な戦いであったことが想像できます。その上で、日本選手では男性の丸山哲史の好調さが伺えます。ショートディスタンスの順位49位、所要時間優勝者タイムの142%は立派です。

しかし、私個人の考えで恐縮ですが、今後、日本選手が第1段階として個人30位、優勝者タイム120%を目標とするには、SKI-Oに素質のある選手の掘り出しと計画的トレーニングが欠かせない課題と考えます。それにはナショナルチームを一元管理できる組織と資金(スポンサー)が不可欠です。

女性は、参加選手が34名で少ないとはいえ、初出場の植野由香がロングで28位147%、ショートの25位136%は大健闘であり、女子選手の今後に多くの期待を持たせてくれました。

解説

スキーO研究会 武石雄市

IOFでは1998年と2000年、スキーオリエンテーリング世界選手権とワールドカップを同年開催しております。

世界選手権、ワールドカップの同年開催は今シーズン限りと聞いておりますが、メインイベントは言うまでも無く世界選手権です。

日本からの参加は、ワールドカップに1月フィンラ

リレーには植野由香が男性チームの3走(他にGERも女子選手を起用)を走りましたが、見事に期待に答え男性と遜色ない記録を残してくれました。彼女の成績は予想以上で参加を強く後押ししたものととしてうれしく賞賛しますが、これは翻すと日本の男性選手の奮起材料になったと受け取ることができます。男性諸君！奮起！

リレーの順位は、念願のUSAに大差をつけて勝ち、14位優勝タイムの145%でした。

目前の目標チームを一つずつ食込み、目標を10位に置くと、これには4名が123%のコンスタントの力が必要となります。当面の目標をこれに置き計画的なトレーニングが必要でしょう。

SKI-O大会に参加して激励・応援してくれた皆様、協賛金を頂いたPamela Flynn (USA ワシントン州在住)はじめ、多くの方々には、選手に代わって厚くお礼申し上げます。

選手の皆さんはご苦労様でした。無事の帰国喜んで居ります。

参加選手の詳細レポートは、4月1・2日、蔵王ライザで報告会(兼春合宿)を計画しており、報告書を別冊発行予定ですが、本紙では、取りあえず帰国直後でもあり、現地の印象を簡単にまとめた選手の感想を以下に掲載します。また、SKI-O WCのレポートは、紙面の都合上、次号以下に逐次、掲載予定です。

また、SKI-O研究会では、SKI-Oに関する用具や運営、競技参加等問合せその他、忌憚のないあらゆる御意見、御要望をお待ちしております。



スキーO世界選手権 日本選手団

丸山哲史(館林OLC)

SKI-O世界選手権に参加して



第13回SKI-O世界選手権がロシア・中央シベリアのクラスノヤルスクにおいて2月28日-3月5日まで20カ国約100名の選手を迎え開催された。

日本からは、関 清(小千谷SC)・若井広太郎(筑波大OL愛)・植野由香(北海道教育大)・丸山哲史(館林OLC)の4名が参加、試合にのぞんだ。

日本チームは2月25日に新潟空港より出発、途中ハバロフスクに1泊して翌日のフライトにて現地向かった。飛行場に到着してタラップを降りてみるとびっくり、なんと通訳と迎えの車が来ているではないか！到着ホールなどは通らずワゴン車に乗りこみホテルに直行。オリンピックにでもならないかぎりもうこんなVIP待遇は2度と経験できないだろう。

翌々日はトレーニングコースに入りワックステストをしたり、軽く汗を流し体をほぐしたり。しかし、頭はほぐれなかった、とにかくたくさんトラックが付けられている。予想通り本番に似たところは急斜面でタフであることに加え、トラックのネットがかなり複雑になっていて細かい地図読みと集中力が必要とされるSKI-Oの本質を求められるものが用意されていたのだ。

29日はモデルコースに入り最後のチェックを行う。地図読みもまずまずうまく出来、あまり不安はなくなっていた。また、午後から町でオープニングセレモニーが地元の権力者でもあり州知事のアレキサンダー・レベジ氏を迎え盛大に行われた。また町への送迎、この後のスタート・ゴールからの送り迎えすべてがバトカー先導でノンストップだったことを付け加えておこう。

3月1日、まずはクラシカルディスタンス。気温は約-10、晴れているせいかあまり寒くない。そして最短ルートで男子が約28キロ、女子が14キロ、優勝予想時間がそれぞれ97分、67分というタフなコースに我々日本チームは150%以内を目標にそれぞれがのぞんだ。結果として男子は振るわなかったものの、初出場の植野が1人目標をクリアし他の国の選手にもインバクトを与えた。ちなみに男子は地元のコルムシュコフが優勝、女子はフットの元チャンピオン、スウェーデンのアリヤ・ハヌスが18年ぶりに再びチャンピオンに返り咲いた。

翌2日は休養日、我々も街に買い物に出かけたりし

て休日を楽しんだ。(お酒の方がマトリョウシカより
人気があった・・・・・・・・・・)

3日はショートディスタンス。男女それぞれ9.6キロ、5.7キロのコースが用意された。この日も天気は良かったものの風が強く寒さが身にしみた。きっと体感温度は-20位あったろうか。関、植野、若井、丸山の順にSKI-Oのお手本といっても良いくらいのネット上にうまく組まれたテクニカルなコースに挑んだ。関は序盤でアクシデントにあい、若井、丸山もミスによりタイムを伸ばすことができなかったが、植野がまた健闘、次回がもっと楽しみになった。このように書くと男子チームは暗そうだがそんな事はない。それぞれの選手が得たものは多く、次のブリガリアではきっとしっかりした成績を残すだろう。

さて、最終日はリレーである。我々日本チームも混合ながらMクラスに正式チームとして出場。距離は一人約11キロ。オーダーは、丸山-若井-植野-関の順だ。

午前10時、「打倒アメリカ」を目標にスタート。この目標を達成するためには全員が良い走りをする必要がある。一走の丸山は、ドイツ、アメリカから数十秒でタッチ、二走の若井が前半でアメリカをかわして三走植野にリレー、植野もトップの160%という素晴らしいタイムでまとめ、アンカーの関につなぐ。関もベテランの貫禄でタイムをまとめ14位でアメリカの前にゴール。

「アメリカに勝つ」という目標も、ミックスチームながら達成できた。そして全員が次につながるレースができたようだ。

男子は地元のロシアが、女子はフィンランドがそれぞれ優勝し2連覇を達成した。

と、ここで大会が終わってしまいそうだが最終日は夜の部、バンケットがある。夕方から表彰式とミュージカルがその前にあったのだが、スウェーデンチームがフライングしたのを見て我々日本チームもビールピンを片手にワゴンに乗り込んだことは言うまでもないだろう。(おかげでトイレに何回も行く事になったのだが・・・)

バンケットを楽しみ、ライバル達と再会を誓い宿に帰ったのは日付の変わる頃だった。

今回の1番のニュースは何といっても植野選手の活躍だろう。初出場にもかかわらず、これだけの成果を残せたことを評価するとともに、これからの彼女の滑りに注目して欲しい。また、チームとして学んだ事も多かったし、それぞれが得たものは大きい。次の世界選手権は、2年後にブルガリアで行われる予定である。しっかり準備をしてもっと楽しんできたい。

植野由香 (北海道教育大) はじめての世界大会



私にとって初めての世界大会で、何もかもが新しく未知の世界でした。

今回は、女子の先輩が参加せず、それが自分の力を試すいい機会になったのか、のびのびと満足の行く楽しい試合ができました。ただ、ビリになることだけはスキー根性がゆるせず、走れるところは精一杯走ったおかげでなんとか得点が取れました。

ロシアの網の目の地図読みは、まだまだ未熟な私には難しく、米国の選手ともロングの後何度か読み合いを一緒にしていただきました。そのお陰か、ショート、リレーでは落ち着いて、より速くルートチョイスができました。

リレーに関しては、さすが男子のコース、モービル道の登りが多くて苦しみました。そこで頑張れたのはチームワークがあったからです。

そんな経験をさせて頂き、自分にプラスになり、参加して本当に良かったと思っています。

この3レースを振り返って、自分では分らない力がついていると評価して頂きましたが、自分でも、もっとトレーニングを積めばもっと上を狙えると自信がついて来ました。今回の経験を活かしてこれからもトレーニングして強くなろうと思います。

最後になりましたが、遠征に当たって応援してくださった多くの方々に感謝しています。有難うございました。

若井広太郎 (筑波大学オリエンタリング愛好会) 2000年スキーオリエンタリング世界選手権を振り返って



私は前回のオーストリアに続き、2度目の世界選手権出場でした。大学の卒業研究や進路決定などで多忙だったため、トレーニング量にやや不安はありましたが、現在の自分の力を知り自身の課題を明確にするこ

とを目的に参加を決意しました。

1.競技について

競技は大会 2 日目にロングディスタンス、4 日目にショートディスタンス、5 日目にリレーが行われました。

ロングディスタンスは、結果的にベナ 1 (バックだったウクライナ人と一緒に、隣接のコントロールをとってしまいました) という成績でしたが、最後まで気を抜かず集中して走れたこと、山の中で中堅国 (フランス、ベラルーシなど) の選手と争うことができたことなど、自分の中での収穫は大きいものでありました。しかし、他選手とのオリエンテーリング技術の差をスキーの力で挽回できなかったこと、後半ペースが大きく落ちてしまうことなど、今後のトレーニング方法に大きく課題が残ってレースでした。もちろん、きちんとコントロール番号を確認するという初歩的な課題も含めて・・・。

ショートディスタンスは、3 レースの中で最もグライダーワックスが成功したレースでした。今回のトレイン内は残雪の古い雪の上に新雪が少し積もっていたため、グライダーワックスの選択がとても難しいコンディションでした。スタート会場の雪だけでなく、山中のトレイルの状態も考慮に入れて、競技に使うスキーの選択を行いました。レースは前半に一つ大きなミスをしてしまいましたが、中盤から後半にかけてレーススピードが上がり、気持ち良く競技をすることができました。唯、目標としていた 150% の壁は破ることができず、自分の中では悔いの残る結果となりました。

リレーは男子 3 名に植野さんを入れた 4 名で、正式な日本男子チームとして出場することができました。私は丸山さんに続き 2 走を走りました。タイムとしても、レースとしても、大会中で最も良い走りができました。

何より (男子チームという意味で) 純正アメリカチームに今回も勝利できたことは、個人的にとっても嬉しかったです。しかし、ブルガリア、ベラルーシ、ドイツなど、前回の世界選手権後から目標としていたチームに大きく差をあげられてしまったこと、アメリカチ

ームの 1 走を走ったスコット = プレバン選手に今シーズンも勝てなかったことなど課題もたくさん残り、{ まだまだがんばらねば! } と痛感しました。

2.生活について

今回の遠征で私が最も困ったことは言葉の問題でした。外国人と簡単な英語でしかコミュニケーションを取ることができない私にとって、英語ができないことは大きなストレスでした。特に空港での荷物チェックや、街中での移動、買い物など、ハバロフスクでは何をすることも言葉の問題がついてまわりました。しかしクラスノヤルスクでは、市立大学の学生ボランティアが日本語通訳としてサポートしてくれました。ボランティアのローマン君とマリーナさんは、日本語を学んで 2 年目ということでしたが、語彙がとても豊富でびっくりしました (もちろん発音も上手だったのですが。) また、私達が街の市場で買い物をする際、お店の人が値段を水増ししないように、品物を代わりに買ってしてくれるなど、2 人とも日本チームに対してとても親切にしてくれました。ローマンとマリーナのおかげで言葉のストレスが解消され、気持ちを競技に集中させることができました。

ローマン、マリーナどうもありがとう!!!

3.おわりに

今回の大会に参加するにあたりまして、武石雄市会長をはじめとする日本スキーオリエンテーリング研究会からは、JOA への選手推薦、派遣状の交付等さまざまな面でご尽力をいただきました。また、荻田育徳さん、宗形竜憲さん、酒井佳子さん、幸山敏克さんを始めとする多くの方々から暖かいご支援をいただきました。この場をお借り致しまして、厚く御礼申し上げます。

そして今回日本チームとしてともに戦った、関さん、哲史さん、由香ちゃん、本当にありがとうございました。皆さんとチームを組んで世界選手権に出場できたことは僕の誇り (ちょっとてれくさいですけど) です。また、来年も、再来年 (ブルガリアだそうです) も皆さんとチームを組めるように、これからまた日々精進します。



スキーオリエンテーリング
世界選手権
リレーコースの一部

コース上で 2 回ビジュアル
区間が設定されている
のが特徴だ。